



鹽尻四扇八

1 曾5  
508  
521

A vertical ruler scale from 0 to 60 inches. The numbers are in black, except for the 30, 40, 50, and 60 marks which are in red. An orange arrow points to the 5-inch mark.

門15  
508  
51

古事記四百八

一 源頼朝

小字忍武者  
任古大將

頼家

按思管砂義時使人刺頼家而  
尚不死因殺其喉拉陰襄殺之

實朝

義時謀テ使僧ノ云曉ヲ  
殺之

一

幘頭の拂と多ひとよ纏の字と用ひ爲ハ非欽

纏ハ冠の緒と拂と多ひとキ屋ヒシヤ山槐記

燕尾或ハ細燕尾等あり多ひとんびの被御り

朱官の赤く壇縞とよびと雲霞の絹とす玉京

あくやの字を假りて用ひ本草盤縞

書すと盤ベカラクと讀ム凡丸を形すと多御多見

りと拂りと拂と多盤縞として

文房の紫木書——あぢよリテ序天文八年

曼華院の尼若うきたまひ——如房信、極の中、  
官女ミツルの裝束アソブをうけて被ハサフる。其の衣キス  
次第一遍ヒツバンの下シモを身カラにす  
立衣タヌキ共エビシ綾也リンドウ裏ハシマ紅

第一衣 紫紋絞椿唐草

第二衣 白紋桐唐草

第三衣 紅紋三重梅杏



第四衣 黄紋唐花



第五衣 緑紋唐花唐草

單ヒトコトりゆき紋花菱ハナヒメこれ多々シタタ衣カラの下シタ

緋袴ヒガハカ紅レッド精好セイホウ裳アラマツ皐敷織アラマツシテ大腰引腰表ハシマツリハシマツ裏ハシマツリ裳アラマツ菱ハナヒメ

又重アラマツ衣カラ化紅ハラハラ二重ヒツ菱ハナヒメ絞アソブ八分ハチブ者ハヤシタ裏ハシマツリ紅地レッドジ子コ子コ衣カラ重アラマツ衣カラの菱ハナヒメ用ヨウ一ヒツハ紅步ハシマツリ平ヒラ行ヨウ少シタ袖アラマツ黑カク絞アソブ青忌アシキ二ニ重ヒツの底シタあぬ紋大祇榮煙ヒラタケイシヤン煙ヤム小コ絞アソブ

白キ浮文の處をうつし御の年號をこれハ如方才了  
考究之は此等亦不外

支那の少油

那社のやを之を解くとち又解  
あをテテモトモ解カヌトモ解  
御身もあらず身ナリモ解カ  
ちうちう十月一日ちう

。紅葉の色をかわす。まきはせは八分春まくわざふ  
。かわいの水の音が心によく入りてくる。やさしくてやさ  
。ねるわのうみが城あと跡をうなづかせる。うそかふ  
。うそかふうそかふうそかふうそかふうそかふ

いふかみを化  
ぬゆゆゆの事  
大槻さす第紅葉を五の新ひりとい  
ものトゆゑ多きあへん  
少神の影が相を失へ多幸もおもしら  
す能工多うるわしくあくせ  
世をうそとせひれいひとせんむ  
あせきされまくひすよるひはりがのなまく  
よもうゆくひちよもんくらうす  
天文八年霜月一日  
一すだいひの

是多義也。華の序焉不す。是華也。而の解  
書もまづせられ。書うる字の二と拂行  
少磨子等の傍もつまづくふぞく

香典

古今の俗考通し才ハ似ウツ曲筆と云ふ事と云々傳  
刑ナシてあの代ノ事すまゝ秀儀之意也。

儀ハ擬也。儀比ナシ。ともに典ノ字註可考正字通。

又杜詩。朝回日々典春衣此典の字ト因。

内外有名祇園師範も多リ。りらう。範涵ニテ。那と  
手小溝運。古詩に辟邪書室篆。範渡闘。

龍舟。と之がみを田舎もツテ。れモテ。

タリ。酒ノ事。考。因。も。考。す。

伽羅日ス黑

陀羅尼集經曰伽羅樹華嚴經云黑沉香ト虛  
空藏經云堅黑ノ沈水ト。今清人謂之奇楠ト  
時珍曰本草置水則沈故名沈水亦曰水沈ト半ハ  
沈者為桂香。不沈者為黃熟香ト。南越志言  
文列ノ人称メ為密香。梵書名ク阿伽嚧香ト  
客有リ曰我城西六角堂の地元汗と流す。まづ  
ヒカル。義楚六帖。彭城ノ采王寺の金佛流汗  
の事と載す。山車其大小。酒。汗。亦。多。少。  
不。く。と。我。相。列。タ。武。翠。の。神。像。リ。亦。汗。流。汗。付。

あれ多福縁のくわうすく歎乞門釜、自鳴り銅  
物流汗あり釜角のれんもひくか歎

如野巫、唯解一街方一枚、一人獲一脯、料何須  
学神農ノ本草、天台止觀七

俗無學比醫辛ですふく手一やうソウス  
りと合家の詮

異邦折字とて右也と說と相守とテ瑞桂堂  
暇錄乃ひ高文虎蓼花列ノ間錄等の小説より  
ぞく我今花押と相手て右也とソクタケト  
相守うう起れ

。斐田大神宮五月四日供御ノ祝詞

掛毛畏幾

皇御神乃純德於奉仰留

年号于夏五月四日

明昭幾珍乃廣前仁頭人姓名定々獻流白妙へ乃  
足幣帛於捧天称辭竟奉流菖酒者膳腹仁  
滿並綠粽者八束穗乃如高知利雜物置足波  
供信奉留

皇御神乃仁美御心仁平久安多所聞氏  
國中廣久豐仁境内長久富美凡波水早  
風蝗乃麥無幾半長乃嚴御世止堅磐石仁常  
磐仁守利幸停給倍

官位尾張宿祢某

恐 美 申 須

。斉田大神宮神幸ノ祝詞兩段  
再拜

年号支干五月音 八月八日 挝毛腣幾  
正一位勲一等斉田座スメヨホシヤミ 皇太神止 称辭 奉留  
大化仁神德乎頭忌アヌヘシトマ 留座志アカミトリ 朱鳥仁靈威乎  
示忌ナカニミタリマ 長鎮座須自此以降エヨリコトトシコト 每年鳳輦於壯利

奉天鎮皇門上仁

神幸於成奉流御供奉仕流者波大宮司於  
始ハジメ 有司乃フタサガサ

祠官御司内人舞人倍從殊天卿輔頭人於

朝使ナツラヘ 仁准倍諸氏乃ジンシ 神人  
御大刀御弓等於捧並ササナミ 宮守兄部等十連乃  
走馬於牽立駆仙蹕

神座於閣上仁遷志奉天封戶禮代乃宇津ノ

御幣於

大内人乃太王串仁取無今歲五月音 官位

尾張ノ宿祢某恭久天津祝詞乃太祝詞辭於

称ハラス

聖帝万壽宝位無動久文武百官景福永ク

昌仁

海內咸久

玄德仁服志 千歲乃之石續來傳信總天子

下乃蒼生

氏人常仁

和樂志其處於得其家於保武

足御世乃茂御世止常盤仁堅盤仁護理恤羨

幸信給止恐禮恐禮申事於平久安久聞

食止申ス

讀畢兩段再拜

八月神幸ノ祝詞同之但改鎮皇門上ノ四字為海藏門外四字又改閣止為大福田ノ祠。神幸還座ノ祝詞再拜

惟年号歲次支于臯月初王

享祝既洛

天志

還幸成奉留於此立盤大饌食八瓈太醴酒於備供奉利廣前歌舞簫管於奏傳謹天宇尚乃幣帛捧事壽志奉留

奧津御世乃礼典永久萬代仁傳信

天津御惠乃景福常仁四民仁及波武

官佐尾張ノ宿称某

天津次能吉詞於奏志奉留事乃由於恐禮義

恐礼義

聞食止甲須

神君幕下ノ十六將

徳川家御再興ノ功臣也

酒井龙行門尉忠次

慶長九年十月二十八日卒

大久保七郎左門忠世

文祿三年九月卒

大久保治右門忠佐

慶長十八年卒

渡邊忠右門守綱

元和六年四月九日卒

辻原六郎太輔康政

慶長十年五月十四日卒

内藤四郎左門正成

慶長七年四月十三日卒

蜂屋半之丞貞次

永祿七年五月戦死

平岩主計頭親吉

慶長十六年三月晦日卒

本多中務少輔忠勝

慶長十五年十月卒

井伊兵部太輔直政

慶長五年八月戦死

高木主水祐清秀

慶長十五年七月十三日卒

鳥居四郎右門直忠

服部半藏

末津藤藏

右有各家傳又見<sup>リ</sup>寛永御撰諸家系図等

源氏歴代人名凡四百二十七人悉富言也紫或紅莊子  
シ事く效て妖艶の詞と巧モソリ寛弘の詞  
如<sup>ク</sup>て原朴の赤<sup>ク</sup>度<sup>ク</sup>リ<sup>ク</sup>河濱の  
序<sup>ク</sup>リ<sup>ク</sup>アリ<sup>ク</sup>アリ<sup>ク</sup>

源氏八九源ノ光行技合

今不傳

二條本

伊房本

冷泉木 中納言朝  
降ノ木

行成本  
黄裱紙

堀川尤大臣  
俊房、本  
告尚達

二但李

從三位纂康子ノ本

降ノ本

唐紙小双子  
法性寺殿  
定家卿ノ本

本  
五

徐本化

卷之三

此外河皮下也。河內源光行八布也。  
按今——自有拾——亦有之。其有之者  
一 李 黃實也。タケタケ  
竹 糜 漱波婆姑也。タバコ  
蓬 漱波婆姑也。タバコ  
漢類說也。タバコ  
漳列齊志也。タバコ

桃竹タケスギ  
方のあとカタノアヒト柳ヤナギ  
行李カウリ 杉植スギ 柳ヤナギ 財マダラ  
旅リョク 手ハンド 稅民テイモン  
わざとワザト わとワト 伸長イニキ  
わざとワザト カウリカウリ 伸長イニキ 生意イニキ

御の事と、又皇明世法錄より之

抱朴子寸裂衣之錦  
蔽未若堅完之韋布

東京高内、甲列の京成屋ちくの支人又令、徳  
多印の監酒ちくへ入らん。れ、角の才子とひそ  
思ひの事うし、ひつめり今川家のをあちせんと聞  
ひと打るる。其様体面し、猪原とまもと筋列知多郡  
彦久打、隠れ、三年の後承禪三年信長義光  
今猪原乃ひ、時高内猪原の姓す、徳長  
謁甚内、日高の口、家えとづく見られ申と、これ、高内語

幕下に属り今日必死と絶手もせんと  
居せし今又之を今川の家臣のみかあらす  
我宣顧に仰つてや萬萬と在官をば済り必  
足滿と申するゝと修業と御りし刀鍛  
と行ひとシ還と取てたまひしとセ一萬万謝  
一と日本かくして恩禱と拝すとおもむと立  
ちよせり行今川の臣と考と云ふ今又萬利  
ありゆきの時をかうく少佐すとて修了を了  
与て改姓の時をかうく内通一萬万桶四百村より  
用あり四百一十五年一五の事と云ふと窓のと  
主事ともあえと組利翁一まゝセクハ全方

號を集めて萬萬と歎せし萬萬の儀はるも  
仰くと申す甲列と仰くと歎せし大信  
長桶四百の役を負ひうれせし必萬萬と稱  
その人を折り半身一多事ある方々の人  
うち小供に一泣くうへ一と大信を祀る所にて  
奉られ終矣

先年或ある事の事にて一多く虚室をも

あれと見ゆ一終矣

左列 墓の碑を案の依みに是ハ武清殿  
終すと元ト法名の碑と云ふ之を後御前段文  
案の碑と申いシテ武清殿の碑と云ふ中段文

忠吉 法次少林イの時機アリタクは居テ、のまく下  
刻方セキセたましい一例アリケモ同ト、其事之  
左半幕ノ行燈シテ紙アリテ福源院の名前  
シテシテ

三十六人の歌詠左法修繕本を替へ物アリ  
其装本の方榮かた

人磨 多引ウツテ 繻袖單ハ白クテの御のりや  
手交シテハウカレ御のりもスルハツラ

人磨の山奈多水波御アリとす御シテ

三法林 衣冠 布被アリ

人磨

家持

林立多水波アリテ御アリテ紺ハモヒ  
ノテ行燈シテ紙アリテ

業平

卷急の冠玉紅 岩の直衣アリテ  
あふ紅

御府のうつまフ石巖、二番

元也

多引 扇衣黄紋アリテシテアリテ

かの肺

えんトミテシテアリテ、小紋の衣

あら忠

冠口子の東地アリテ、あせん  
ちの忠も尼ラバにあられ 紋ハ相竹 芳子の衣

みゆきの本草アリテ、えんトミテ、

女宿 女御

妻ノタ衣  
船の持

札帳

夏紋桐

宗子

白タケトキメニ着  
久ルハツ着ミリ

故ゆき

妻ノタナヒテモチテ老もびの冠老子  
衛府のち筆年子が久いを

主子

久衣 りそく子  
アリタマシヤ

真風

タ衣 うすもと  
アリタマシヤ

是則

妻ノタタキ船 故小たてヨリ  
アリタマシヤ

女痴人

タリ衣川ニ  
アリタマシヤ

能宣

妻ノタタキ子モテ船アリ

能宣

妻ノタタキ子モテ船アリ

茶盤

タタキ 阿子タタキ

以上右左

貫之

妻ノタ常侍アリテアリシテシタ

伴幣

タリ衣川原  
アリタマシヤ

赤人

狩衣 海松文子アリタマシヤ

尾形

アリタマシヤアリタマシヤ

船の持

友則

妻ノタ常アリモサロモタマシヤ

小町

妻ノタリタマシヤ紫毛筆アリシテシタ

あさ

妻ノタ常アリモサロモタマシヤ

え光

笠の袍紋

衣冠

情脅ひう矢 幸吉毛色し

筆

忠之林

笠の袍 緑隨身毛立細毛

毛化うてんの毛色 細毛

白毛

物毛

頼りと 衣冠つむじナ

ナシタハシ

主ゆき うイミねり

主ゆき かくまくらうに

順

カクマクルヒツシテ紋

元浦

カクマクル平九

元子サ カクマクルあキ紀

仲文

カクマクル平九

忠見

カクマクル長祐

白鷺

十勢

カクマクル十勢

飯ハタケ

以上六右

左の外子母ノリ付アリトス

膝里モモ 眇ノケムニモ蝶アセ 溝眞

三毛

晶四弓臘合付

畠分毛

畠

水

水

一万弓方と一町ノ一弓ハ二町是と三弓ありウチを

一十弓と一反ノ一弓十石と一町ヒメ

天上天下准我獨尊要度衆生老病

此久長阿含經在り釈迦云諸佛ノ常法ハ毘婆  
尸菩薩が生ル時右ノ眼ヨリ出テ七歩ニ四方ヲ見

手ヲ舉テカクニシトテ諸佛常法ト云故釈迦ニモ此事アリト浮屠氏ノシリ虛誕妖妄ノ事ヲ作リテ愚俗ニ驕リ侍ルニヤ初生ノ赤子自歩言語スル

丁ナシ若シ有ラハ歎ト云ヘキノテ

十于ノ于ハ幹也木ノ幹アル十二支ノ支ハ枝也木ノ枝アルカコレ

金仁山ノ説ナリ干工支是三千日ヲ數ヘ

ヨムホヘナリ

范父正ム蚊ノ詩ニ云飽ハ似櫻桃重ノ饑如柳一榮ノ

輕シ但知從此去テ不要向前程

孫ムノ談圃

仇池筆記東坡所述載ス石善醉中一奴ヲ縛シ僕ヲメ

河ニ投セヨト令セミニ僕コレヲ哀テヒソカニ緋セシ石善醒テ

悔シカニ僕其毎ニ暴ナルヲ畏レテ殺セシ由ヲ云テ

實ヲ以テ告サリシ普其後病ニヲカサレケルカカノ奴

索怨メルスカタノミ見エテ若シニ既ニ死セントシケレハ止ム

コヲ得ズメ彼奴ヲ呼ヨセコレヲ示シケレハ縛狼モアト

ナク普ガヤニヤカテ愈ケルト記セリ今ノ世某ノ崇

リ彼ノ惡灵ナント云ニテ恐シカルモ皆此類ニシテ我ヨ

ク迷ロテ苦シニ侍ル盃裏ヨ影ヲ蛇ト驚キ夜路ノ

茄子ヲ蛙ト疑コ侍ラシ心ニハアラヌモノニ日く見ヘン

胡文定久我ニ子弟云對人言貧ヲ其意何居汝曹

カタカラ

志之ト叶大夫ノ言ト我人可耻窮之ノ言ヲ發ノ轍六市

アハレミヲ乞フニヒトシ士トシテ宣丐者ト意ヲ等クスヘキ  
カ鳴呼貪八士ノ常也何ノ義ヲ忘テ渴富ヲ永シ  
本願寺 始ハ大谷然ニ山科ム撰丹大坂ノ天滿  
其後京師六條ニ移シ建ツ

本洛東大谷 今ノ知恩院ノ境内  
善鷺カ  
子ナリ  
文永元年  
年号  
龜山院 一寺ノ建テ本願寺ト号ス  
歟し凡実ハ親鷺カ女ノ覺信尼所建ル故ニ其子孫ヲ  
本願寺代々ノ住僧トセリ凡本願寺ノ庵山ヲ親鷺  
トシ第二世ヲ如信トシ第三世ヲ覺女トス覺如カ父覺  
惠ハ龍門佐藤原廣綱日野ノ  
慶流カ子女ハ親鷺カ女覺信  
尼也覺如九代ノ孫顯如故アリテ門跡ニ准セラレ大僧  
正住ス

如信ハ鷺カ嫡流 但シ善鷺カ兄ニ印信ト云フ僧アレ 十レ庄  
覺信尼カ私ヨリ外孫宗宗テ正統トナレリ今ノ本願寺  
代々ハ親鷺カ譜脉ニアフスサテ善鷺如信淨如ト  
相続シ淨如カ子空也願入寺ノ閑祖ナリ

### 本願寺ノ二流

顯如

光佐

教如

光寄

東流ノ始ノ号信淨院

准尊

化超真正寺ノ閑祖号花恩院

准如

光昭

西流ノ始

教如不法故退ケ准如次領セシ是ヨリ代々相承ス  
其後教如別ニ寺ヲ東六條ニ建テ本願寺ト称セシ

後至三流妾ノ争ひ宗派ヲ論シテ経敵トナレリ

本願系裔ト表裏向各ヲ讀テ考フヘシ

織田家ノ世系ヲ見シ其始祖權大夫平ノ親真三位  
中將資寧<sub>ヲトシヨ</sub>子ナリシ江丹津田ノ卿ノ長某ニ記シ  
テ脇シム資盛一首ノ倭歌ヲ筆ノ児ノ母ニ附セリ

アニ尤津田ノ細江ノミヲツクシニヌソラカキルシケリ  
彼妻遂ニ津田ノ長カ妻トナリ孤兒ヲ養フ其後代々  
彼資盛筆ナル歌ヲ家トシ傳ヘル織田ノ宗領  
伊勢守信安ニテ傳来セシ其子彦立即信友信長<sub>ミ</sub>  
モサレテ彼短冊ハ信長ノ家ニ藏メテレシ天正十年  
六月京師未能寺ノ変ニ鳥羽トナリシトニ

品敏定

織田三郎

敏信 大和守  
斯波ノ家臣 信安

伊勢守尾畠倉城主

彦立

信定

彈正忠

信秀 備後守

信長

天文廿三年七月廿一日織田彦立即信友其王君斯波治部  
大輔源ノ義統ノ朝臣ヲ裁シテ清須ノ城ヲ築ヒ取リ  
ケル其明年弘治元年四月二十日信友誅伏ス<sub>ト</sub>

私云彼歟ハ覺盛法師ノ歟一等シ續編撰集  
隻ノ歟

五月雨尤津田ノ細江ノミヲクシニヌソラカキルシケリ

津角ノ細江ハ八雲御坂播磨ノ名所ノヨシ記セリ  
其外藻塙及勅撰名寄等ノ説モ同シ寶盛ノ朝臣  
古歴ヲロキカヘテ近江ナルト立文字ノ改メニヘヌ  
ゾトソ久字ニカレケルモ児ノ丁シフクノミテナラレ  
タニシケルニヤ凡フ諸家相傳ノ家説ニ彼此同トモ  
ユコタカヒスルモ多カル古之風土記ノ説ト似タリ深ク  
尋ナアナカニ疑ヲ残スヘカラス

貞觀十三年閏八月制メ定百姓葬送ノ地其一立條  
荒木ノ西里其二在六條ノ久安原ノ里其三ハ在十條  
下石原ノ西外ノ里其四在土條ノ下佐比ノ里其五ハ  
十二條ノ上佐比ノ里三代實錄ノニナヨ畧書ス

帝京ハ九條ニカギセルヤウニ世人ヲモヘリ正史十一條  
十二條等ノ称アルヲ知ラサルニヤ因ニ云フ京師立  
三昧ト云ハ今ノ葬地也所謂鳥部野中山最  
勝河原鶴ノ林狐塚也一説東寺四塚三條河  
原千本中山延年寺トコレカ墓所ト称セリ  
今ノ人志中よりハ古ノ人となり人々と老人  
は少數ト東照神君歎夫先生ニ號シテ有  
識者句平日口鼻と見テ之を取テナシ其  
人の名を云ふ事無くして人をもあらず  
ヨシ多モ其を少ひ少すやソトナカバ死

中務卿

左馬寮ノ御監

明智光秀ハ初久方家ノ足輕トテ

信長殺害ノ後大政大臣ヲ贈ラレ信忠ニ左大臣ヲ  
贈ラル一世ノ中參内拜賀ノ礼モ十ク冠帶ノ粧元  
シタセハスノ贈官珍シトテ

右ニケ條三季物語ノ説也文ヲ畧シ記之

御位記

從一位源ノ家綱

右可<sub>ス</sub>贈正一位

五丈十一翁

中務威振万邦化溢四海勇智安世武德  
直今宜遵慎終之禮式<sub>ノ</sub>兼贈爵之恩<sub>ノ</sub>可  
依前件主者施行セヨ

延寶八年庚申五月廿一日

中務卿

閑

正四位下行中務大輔<sub>臣</sub> 源朝臣資冬 宜

正四位下行中務少輔

臣

藤原朝臣祐宣

奉行

新波源氏大浦義綱の家臣名古尼山<sub>ノ</sub>所<sub>ノ</sub>兵  
兵庫の主<sub>ノ</sub>人<sub>ノ</sub>アリシテ<sub>ノ</sub>小西統も<sub>ノ</sub>うな<sub>ノ</sub>若  
子<sub>ノ</sub>アリシテ<sub>ノ</sub>知多<sub>ノ</sub>守<sub>ノ</sub>御<sub>ノ</sub>ナリ士<sub>ノ</sub>モ<sub>ノ</sub>也  
付人<sub>ノ</sub>三<sub>ノ</sub>人<sub>ノ</sub>引<sub>ノ</sub>持<sub>ノ</sub>ナリ甚<sub>ノ</sub>弓筆角<sub>ノ</sub>酒<sub>ノ</sub>肴<sub>ノ</sub>也

もかうとす。年古ニモアリシル。す。か  
を西ノ高麗へ。あざれをよろみ。ひくねみ  
う。うちせせ先たひ。ひ心。一宿。す。行。る  
新成の都至鐵風。あら。が。う。り。ま。正。と。鳥。の。み  
久。こ。とき。う。れ。そ。を。よ。う。す。テ。か。う。  
久。も。う。三。の。青。い。そ。う。ら。う。す。ナ。う。き。考。の。  
そ。す。ア。ヤ。テ。は。す。か。う。く。く。く。く。く。  
か。う。き。二。今。れ。多。築。の。よ。歎。故。の。人。を。覆。  
も。か。う。く。う。く。う。く。う。く。う。く。う。く。  
う。の。ナ。の。次。是。事。と。と。か。ま。う。下。う。ま。う。  
と。す。ア。ム。訟。今。れ。多。内。う。多。升。と。深。か。う。

少子す。一ノ聲高き者も多也。而して  
上野介の信長が不戻の若年より、名古屋  
内に之をもて付けては連と名づけし。而して  
元寇を命ぜ、其の部曲ありて多くを奇勝めり。而  
れよりは築山の如きは、既統ての所なり。  
左吉二年六月忽々近江へ移る。まことに  
功業をもててゐるがゆえに、あくまでそのそ  
とをもてて、近江築山を名乗ることもあらず。而して  
年と譲。八年八月、近江守近江守叶と大うけ。是時  
焼失する。而して上級介は心をもつて居る。  
もつともかく、年をもつて

文政十二年正月二日  
久の若木川移水をひ柳井今事と家ひやうと  
移すを義経と御へて自清改めと事ひ直と  
シテ有事知り一ノノカアトトリシモ義経は  
草はの川をうち名古屋へあれ上源とれし  
れを以てなりくじまくセミ上源より  
まくせしる華南名古屋へくみくみ上源より  
セテ以て江戸元年四月に上源より軍と清  
源と功小布ノ暴惡在室主と合長  
西脇山口と一門ノ城砖れれ多キモキ  
町家の子孫のあり居のれんとせよと天野

修山の清野と高麗三國の歴史と之の事  
有と云う事の主義をうかひあらうたる  
うつても大権門の事と有と云ふ事とれど  
元上源より清野と有てこそ能いほく  
うつしと大義院故にとて清野と殿長  
義と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事  
本末を争ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事  
のアラカニヤマウチカニ  
天文記ノ二

○ 皇野ハ三河國の在右也華南の本源の源の鹿流之  
○ 伊豆沼鐵虎傳名抄の後文今川仲秋の子孫

少々今川奉範ノ如臣の後より今も少々在  
仕の西門源尾りとも今川の裔也

春日ノ若宮と立所の皇子と称す故れもの御  
祭る神と不詣式傳は曰

○皇孫尊 太王命 手刀雄命 押雲命 通合神  
右立柱太神 トヨタケミコト 但シ素戔嗚尊の御子アリテ林  
一乃ノ神社と稱ナセモソノアリ

○寛永十年夏 敬久奉幣斎田社而祈晴ヨラ

幣使八御足輕頭水野龙門音石  
祝詞ノ作者武野安舟

尾張國愛智郡斎田仕程須大神乃廣前仁  
宇豆乃幣帛手捧主称辭竟奉留今茲癸

酉乃年六月十六日因同徒一位權大納言源君  
侍臣等子為使トキ大神乃廣前ル爾幣帛手  
奉利珍膳子備天御飯波墨物仁盛利呈志御  
酒波脰腹仁滿ニ倍野仁生留耳菜辛菜山仁生留  
木ノ實草實青海原乃奥津藻邊津藻仁至  
滿天種ク乃物子如山尔積重称如星仁陳置幾  
大神乃御心平久安人聞食止称辭竟奉恐羨  
恐羨毛白ク今茲夏乃初子利霖雨頻下河水屡  
溢天水田物陸田物所損傷仁遭アマハシ人民灾害仁遭アマハシ信利  
因是斯日子撰天宇豆乃幣帛遠令捧持豆称  
辭竟奉留毛畏幾大神靈異仁依天連アマ雨

波晴禮洪水波治利國中乃民乃作物波力穀物乎  
始至畦圍ヨカウマ仁生留草乃片葉尔至一万天豐成幸翻百姓  
歡比樂羨國安久穩仁護利裕倍止祝部等乎志天  
称辭竟奉久止白須

六月十七日俄然大雨民大悦

松本の古參觀主も、和泉の信光主も、列々  
つゝよしり也。四臣七家あり、所謂酒井、中  
庭は林小喜家、成於二年國高。天北、樺内、  
松毛也。又三列圓列打つて、成於元是萬  
大能の末尾也。之は既に成れり。以ニ底ノ隣子山中  
酒井の母氏を示す一家也。

致祥院政所  
秀次正祀也

卷三

濃字

卷之三

卷之三

朋  
記

元大

夫人

正紀

致祥院政所正妃也  
或人問大和大納言始基處之南明院大夫人大權現八  
秀吉のもテ枝りし室家也。秀吉は嘗て御内閣に不覺  
秀吉の異父兄秀次秀次姫秀吉の母久 大政所  
也秀次の母と生す秀永伝長久ノ内相也。りく  
ケ嘉とあらし秀長初小市郎と称ス  
後大和大納言也。南明院解もと  
生を。秀吉肇基の附けあひと育セ  
流世能わはどく秀吉の父とす。若叶收族秀吉  
の父始ハ福原氏也。沙也と改ムトシ  
叔人同姓。又秀吉の御家人涉れの沙也の中威  
用兵より力の次々行陣の与力也。主事酒井氏

かあらかうの支派とても示今主事の家うちゆく  
養ふ不む毛と十六年十一月晦。平岩主計に親告  
卒せしは享年四十。 神居尾足（少上す）ありて  
故親志の四后等六隊。 故云アニ属ト。主事  
屋主の令セシム。 令セシム。 令セシム。 平岩主計と号シ  
加賀隼人正成。これ、令セシム。元和二年正成  
ト。 令セシム。 令セシム。 令セシム。 令セシム。 令セシム。  
内と外と力と爲り。 同三年平岩元（中根彦吉  
重次光平岩）。 令セシム。 天地作事。 事。 治と經久  
不令。 宮田山源義。 麻浦酒と古良の  
与力。 え。 一列の士。 放東家のみ力算い。 がで

ゆれと放とさる。 修業御とく。 うとく。  
宮水三井。 加賀酒と古良の内。 有らぬの  
をと抜か。 と。 田舎代のとく。 うとく。

うとく。

。 南院光室家玉大夫。 神君の妃秀吉妹君也。  
天正十六年正月十四日卒。 始ハ尾  
別の士副用。 有らぬ。 有らぬ。 有らぬ。  
有らぬ。 和傳の時副用。 今。 たまに。 世我傳。 と  
離別せよ。 今。 得川良。 有らぬ。 有らぬ。 有らぬ。  
有らぬ。 有らぬ。 有らぬ。 有らぬ。 有らぬ。 有らぬ。  
有らぬ。 有らぬ。 有らぬ。 有らぬ。 有らぬ。 有らぬ。 有らぬ。  
有らぬ。 有らぬ。 有らぬ。 有らぬ。 有らぬ。 有らぬ。 有らぬ。

富あとす。乞自向後男とす。則利磐。  
源舟と称。鳥糸ヤスモリ打ハシマツ用ヨウ也。所シテ不  
靈陽院ノ將軍従三位權大納言義昭ノ卿モニ元年七月  
お毎の後後多ナの御モ。る男モと生ス  
えりと高タカ木キと峰ミツ圓タク家ハセ正長門守始モ。  
あけの波ハタケの傳ツヅ。金カネ二ニ十トシの領リと所シテ了ス。  
あり孫子ムツシ被ヒ領リ。家ハセノ属シテ仰ハサ列ハサ。集ス。  
金カネ領リて三ミ石イシと更アリ。時ハとゆシと相シ得ス。  
往ハシマツ。事ハシマツかく。沸ハシマツれの事ハシマツ。  
其ハシマツ是ハシマツ。等ハシマツ接ハシマツ處ハシマツの事ハシマツ。も生ス。

此活ハシマツ。世運ハシマツ。如ハシマツ。其ハシマツ。年ハシマツ。と  
う。如ハシマツ。も。如ハシマツ。と。

因白豊臣秀次ハ左大臣正三位。

前田利家ハ從三位權大納言モリ。薨後贈從一位

岐阜中納言正三位

平秀信モリ。長十年而仆ス。於高

野山薨ス。号大善院ト。傳論語ノ。薨ハシマツ。日非也。

淺井モリ贈中納言藤原長政天正元年九月日横死

寛永九年九月贈中納言従三位

鈴木八穂積化一志井伊洋ノ官人。近本。立。安。好。信。也。

藤原秀卿従四位下武衆

鎮守府ノ將軍

延喜十八年十月二十一日軒白蛇龍神與十種

珍宝ヲ

庸生系品ノアハテト秀卿水府の清修乞  
三上山の瑤虹と因テトソニ事多々有リモハ近テ  
夫とノ事トモトサシテ庸生家修メ時化と見  
名化と斬シキセ

名	改時申上	可稱	毛利氏子
別官	中望	右近	
式時申中望	中	右京大夫	
判	少輔	少輔	
而後	中	兵庫助	仕官
而後	中	伊勢	
負未	助	伊勢	

力とやうやくのまゝ家と後禍と有也。勝手秀吉  
巴夫うるおの五郎と云ふ。久保止歩。松元  
家主了て及とあつたまへ。大内吉  
家家兵丸のとまとす。松平三  
と保らまわ。三  
と詔多の言ひかげ。鸣呼  
盲人。五流。  
城方二流。左近流。  
大山流。大正流。  
小文流。

品生佛坊

達人年中人  
始誦平家

建業，字見二水記。今書檢授擬僧官。

如一束業

覺一達業

一  
通

清景

城一建業

城元住  
城存

洛東八坂鄉一謂丁此  
称八坂方

。永正記自永正二年  
立村力多竹の尉入道家福斎筆也  
は書と承らむ年二月大卒止  
自古以來の傳也取て之を傳承す

馬琴の歌は古世の秋の氣も  
なきよかのせよとてもんじる  
活風の音楽のものよさんへこりゆく  
一搖子二斤壺三水字瓶四蒼海波  
むまぐのわよくす 驛ノ長トラノシ  
琴立笛調也

宦無相之ひめ御子也ミマ。方々の如きをもて  
ちうまの門の御子をあひたるは浮の長  
ソナーベシ。之より御子をもて候トシテクアリ。

驛長莫敏鷲時ノ変故一榮一落是春秋

口詩五代物事外不<sup>レ</sup>て日本云詩也河海

支那枝武義七黨とふあ

丹ノ黨 丹治真人也宣化帝ノ胤中村安倍蒲  
小鳴青木等の顔多

横山黨

又猪俣黨も称す小野朝臣也敏達帝胤萩野四部  
遠田海老名野内揚下野内横山の祖武尾子義  
隆の三男玄蕃也時賀也<sup>ヒニ</sup>流本ト一姓<sup>アキラカ</sup>也夫<sup>ハ</sup>  
黨と云々有象と云々

一  
横山一

横山一

兒玉黨

本藤原ちり中以<sup>チ</sup>平氏称せ<sup>ル</sup>者多<sup>シ</sup>一  
中庭倉笑野若兒玉等族數多

私黨

木私部也用化帝胤私市川原久下等數多<sup>シ</sup>  
キサイヤ

西<sup>シ</sup>東<sup>ヒ</sup>黨

西<sup>シ</sup>東<sup>ヒ</sup>黨清<sup>シ</sup>源<sup>ス</sup>之<sup>シ</sup>七黨と云々四家

稱セ<sup>ル</sup>ハモト者东良<sup>ヨシ</sup>也畠田列府<sup>アキタ</sup>等四井

の四稱也

雙魚ノ宮角鹿門内<sup>シ</sup>左名蛇馬<sup>シ</sup>宮水 中佐之官

左猿毛連直<sup>シ</sup>右<sup>シ</sup>宮承丁亥初<sup>シ</sup>右四月右地<sup>シ</sup>庚午

被<sup>シ</sup>固<sup>シ</sup>左<sup>シ</sup>布<sup>シ</sup>引<sup>シ</sup>左<sup>シ</sup>室<sup>シ</sup>左<sup>シ</sup>ウニ事

サ<sup>シ</sup>左<sup>シ</sup>ミ官<sup>シ</sup>左<sup>シ</sup>神<sup>シ</sup>左<sup>シ</sup>中<sup>シ</sup>竹<sup>シ</sup>と抜<sup>シ</sup>元<sup>シ</sup>下<sup>シ</sup>の

左<sup>シ</sup>連<sup>シ</sup>左<sup>シ</sup>房<sup>シ</sup>左<sup>シ</sup>御<sup>シ</sup>左<sup>シ</sup>保<sup>シ</sup>左<sup>シ</sup>行<sup>シ</sup>左<sup>シ</sup>作<sup>シ</sup>左<sup>シ</sup>改<sup>シ</sup>左<sup>シ</sup>

。昔事と向ふより清承本代より後す天皇以集御房  
の元と取一ノ角川也とちをと津せと名前を有り  
若長之年宮主至る。神君と忠<sup>トシ</sup>。御<sup>ミコト</sup>  
乃列小作<sup>トシ</sup>と云うと多<sup>トシ</sup>爲<sup>スル</sup>候<sup>スル</sup>。候<sup>スル</sup>後下大括毛  
と相<sup>セ</sup>。尔<sup>ハ</sup>ノ後の行<sup>ハシ</sup>竹田水<sup>アシタカ</sup>と計<sup>シ</sup>  
唐國<sup>タカサゴ</sup>ありうり修<sup>ム</sup>。後江口の事處<sup>アシタカ</sup>に達<sup>ヒ</sup>  
八多<sup>ハチタカ</sup>と號<sup>ス</sup>。ウタカ所酒海<sup>ウタカ</sup>の所取<sup>ハシタカ</sup>。一萬  
石<sup>イチワ</sup>。御<sup>ミコト</sup>事<sup>トシ</sup>。御<sup>ミコト</sup>事<sup>トシ</sup>。御<sup>ミコト</sup>事<sup>トシ</sup>  
御<sup>ミコト</sup>事<sup>トシ</sup>。御<sup>ミコト</sup>事<sup>トシ</sup>。御<sup>ミコト</sup>事<sup>トシ</sup>。御<sup>ミコト</sup>事<sup>トシ</sup>  
御<sup>ミコト</sup>事<sup>トシ</sup>。御<sup>ミコト</sup>事<sup>トシ</sup>。御<sup>ミコト</sup>事<sup>トシ</sup>。御<sup>ミコト</sup>事<sup>トシ</sup>  
御<sup>ミコト</sup>事<sup>トシ</sup>。御<sup>ミコト</sup>事<sup>トシ</sup>。御<sup>ミコト</sup>事<sup>トシ</sup>。御<sup>ミコト</sup>事<sup>トシ</sup>

。明應三年將軍御元服聞書ノ十二月廿日記正和

二年三月廿七日ノ新引<sup>ス</sup>云足袋御免之更<sup>ハシタカ</sup>草襪<sup>ハシタカ</sup>年  
齡立旬以後可被<sup>ス</sup>免許<sup>ス</sup>。但雖不及<sup>ハシタカ</sup>齡為病休  
者ノ蒙<sup>ス</sup>御免<sup>ス</sup>可着<sup>ス</sup>白草<sup>ハシタカ</sup>襪<sup>ハシタカ</sup>

凡脚<sup>ハシタカ</sup>足<sup>ハシタカ</sup>神人足<sup>ハシタカ</sup>少<sup>ハシタカ</sup>免<sup>ス</sup>。又  
免<sup>ス</sup>。今<sup>ハシタカ</sup>足<sup>ハシタカ</sup>足<sup>ハシタカ</sup>少<sup>ハシタカ</sup>免<sup>ス</sup>。又  
唐<sup>ハシタカ</sup>足<sup>ハシタカ</sup>足<sup>ハシタカ</sup>少<sup>ハシタカ</sup>免<sup>ス</sup>。又<sup>ハシタカ</sup>免<sup>ス</sup>。  
寛<sup>ハシタカ</sup>足<sup>ハシタカ</sup>足<sup>ハシタカ</sup>少<sup>ハシタカ</sup>免<sup>ス</sup>。又<sup>ハシタカ</sup>免<sup>ス</sup>。  
中<sup>ハシタカ</sup>足<sup>ハシタカ</sup>足<sup>ハシタカ</sup>少<sup>ハシタカ</sup>免<sup>ス</sup>。又<sup>ハシタカ</sup>免<sup>ス</sup>。

。日次<sup>ハシタカ</sup>御免<sup>ス</sup>。又<sup>ハシタカ</sup>免<sup>ス</sup>。又<sup>ハシタカ</sup>免<sup>ス</sup>。

古事記

不外放のまたの事同五年作の古事記

塔左記

永保二年

六條院顯時記

永万九年六月

朝隆記

保元年

朝經ノ記

永治元年正月

經俊卿ノ記

正元年正月

師弘記

正元年正月

實躬卿ノ記

正安三年正月

成通ノ記

久安六年正月

光雅卿ノ記

嘉應六年正月

親字々ノ記

文祿六年正月

外記師尚ノ記

久治六年正月

小外記廣元記

久治六年正月

長兼卿ノ記

久久三年正月

雅兼卿ノ記

保安四年正月

以遠記

永久三年正月

信範ノ記

治承四年正月

為經ノ記

寛永四年正月

伊綱記

正安三年正月

賴業ノ記

久秀四年正月

賴資々ノ記

美久四年正月

經光々ノ記

仁治二年正月

憲說ノ記

建久四年正月

右少毎家光ノ記

貞應三年正月

左少毎家光ノ記

貞應三年正月

大方記

永保三年正月

右少毎資宣ノ記

寛永四年正月

弘長九年正月

世外樂多範記

改元

久安五年十月廿日

仁平二年冬三ヶ月

同三自

正月

至六月

同至七月

久壽春三月

春三月

至七月

保元一自四月

至七月

仁安九自九月

至十月

同二自

正月

至正月

同二十

月

同三七月

月

右各一冉

ノアノ

同十月一冉

冉

同九月二冉

冉

同十一月二冉

冉

同四月

冉

同十二月二冉

冉

冉

嘉應九年六月

同九月

同人  
九月

右各一冊矣

凡通計一トテ廿四冊ウツリ其外精タビ因太曆薩  
戎記梅松論元弘日記以下の記録又精平部  
アラケタスホ古記と名ナシ也古事記アラケタス

此書は年号古く助文にあつて之が  
手一ノ年甚三ノと批す

嘉歴改元より時、文章博士成考の内あり。又延元ノ改元に式部大輔長貞の考、眞和ノ改元に文章博士宗範の考、觀應改元に式部大輔長貞の内号にむ

丸弘ノ改元の時文章博士右淳の考正慶ノ改元  
に文章博士在成の考等にあリ

安 正慶改元の時正三位在登考の内にもす  
左のゆふれどひの年号ともりもすも立  
致もうて止ゆきをあじめ文をあつてあらわ  
ゆきとあくもたる年号はけり月いられ  
ゆゑ又期あくもら行わりノ人のせよ奉ケや  
らくも甚期ある事ありテ

希下の少流先生邦  
て歟久と先に定めテ  
たまよ今付は唐氏行  
ひ受けもゆきあすは文  
熟すよわうとも意を徑  
せん大へるゝ事

。終りのとりと曰へやてよとす。す

合德院 書 説命曰朝夕納誨ルテ輔 合德ヲ

大猷院 周官曰若肯大猷制治于未亂保邦ヲ于  
未危ヲ

巖有院 書ノ臯陶謨曰日巖祇敬六德ヲ亮スハ有邦  
巖有公宗号也宣命使平松中納言時量位記  
使ハ少内記

○巖角の八神宮參毛羽ノ御庭之御ノ事ニ神ニ詳  
セサシ謹テ按モリ是則素鷦鳥ミツバトノ机施ミタマと  
祭マツル玉大糸引ヨシヒナシハロ神社と御因体  
ノノ社号口授ハシマツル極マツル之ノ事ニ慶ハシマツル

。列於年の三月院是親民主泰親王少免身、舊大  
の通端アカシ今百石の主事アシタシ有アリ但アリ旧記は  
中足才二代の御奉所を安若寺アシタシと云ひ之華  
一イチ九クシ一イチ九クシ今の三月院はその如きの  
安若寺アシタシ也。初年寺信光主の御奉所を信光寺シキヤウジと  
其後嫡子長治家シキヤウジの御奉所を岩本の御奉所イハラ也  
之後少而家作アシタシの御奉所を大樹寺シキヤウジ也  
我尾公每年正月十日御置アシタシの御祝マツルのもの  
之ノ御マツル也。先ゆ生アシタシ也。御白門マツル也。而も  
年既終アシタシの御マツル也。御白門マツル也。御白門マツル也。

佐昌曰先日若家人あわく尼寺もまし  
旦ツ拂る年々修むとも思ひてそれ言ふをれをぞお望  
御ふ多幸と爲て大樹向ふ少ちの山中店  
すこ少く向づく所の時めどそ機子すまう事と  
却れゆきもあらずとより故に取次よりす恒例と  
一と西月土日とて拂ふと能くあつ本うち其  
方樹の拂む代仕事心行う事ねの事より以  
前之の事の拂むたゞことと後事とやらむに  
至り事事なき事家儀渡の拂事度に事事  
却り事事なき事事度に事事

後水庵院宸筆

。はしごひらく居候との少事まほ居てお院ソ  
ノアリトキトモ御家の繁事多々今く御社の光輝  
もとよくせひりそくおもひにそくそせの  
秋むかくねねねあらふうそとてのこしてそ  
うんほく先とくそくつとく

將軍家序

竹石代被せうとく　表筆の邦書乃義  
あり希有の事　そくけく　そく  
東の聲高き御家の安泰の事あらううとく

老の身かくに  
沙門心をもてん  
あひがむくに  
天神をもつひき

十一月一日

唐宋八利

左の幕布院家内事也  
辛未八年六月三日  
の付  
院よりまづせん  
南書將軍家  
大猷院  
家光久  
以上書矣

正保二年 七月廿三日 家賜公之二位極大納言

○大樹殿下 家光久  
三男 丙午保三年  
皮丘月八日 誓七佛母  
延一左上秦原ノ光子

行  
人  
書  
卷  
之  
三  
庚  
應  
二  
年  
癸  
巳  
八  
月  
十

同月十九日充服兼<sub>主</sub>馬頭十月七日正三  
寬父元年辛丑十二月二十八日參議中將如元

延寶八年 庚申立月七日擁大納言從二位  
八月二十三日征夷大將軍右近衛大將右馬寮ノ御監

淳和粹學兩院別常氏長者  
同日內大臣正二位右大將如元隨身兵杖牛車ノ宣旨  
宝永一年乙酉三月右大臣

吉書の行ひが今と同  
ゆきすゝめあり其二

如丸

尔二の字  
余也

未ワヌ字  
和字

アスル字  
ナム字

て

ナノ字

凡サツの字

サツの直音

レノ内少未トアアセセセトテをすれ參幻  
事説了ノリ物もれ事アリシテ事

合タリチ跡の事と乃く之

。南都真福寺一乘院の御後院天皇園東  
下され——元亨四年正中元年九月二十四日の輪

旨あり摺尾

伏マサケ天命ヲ別當權中納言定房下ス

。大勅使万里小路中納言宣房

。歎アハハ相傳太平記所謂阿波守禪上告文  
ノ原即は繪翁也。今其子也。少繪翁の中征夷  
親王將軍。云々宗子親王以下。可書  
事焉。

。泰平三年本元義仲入洛。三年家病死の日  
京師一人ヤシ。辞りたるのゆう。——證真尼  
下さは元の蹟とす。とて少翁。——後事もと  
あく。故もと。法也。房八臂の三移多の業を  
もとへ。序けられしと。之と対する。房の  
云々。少翁。新氏也。予曰。一人私。——少翁  
帝少翁也。有自島と制て。少翁乞る。——日宗師

常一の事と呼んでゐるが其と之と云ふ事も  
有ると、大抵かりて浮屠民可ト  
至る。因城ちるまえして、もとれり。  
中山より本院の板ノウツメカツミテアリ  
有り。本院の板ノウツメカツミテアリ  
左半に京詮六用の金本と云ふを今所謂唐  
字無ゆるを云ふ。本院の板ノウツメカツ  
ミテアリ。板等の名目あり。本院床の事  
書等アリ。今より本院床の事と云ふ。眼  
鏡之多き今め納メ。眼鏡の内と見る十二面  
を併とよむ。後世燒けたり。その事はやく

家書今回  
丁

皇年代記云康安元年十一月八日 東寺長者補住  
寅ノ刻後光嚴帝幸山門エキ 同日延御武化  
行宮エシキウ け時佐アシタツ 入通アシタツ 我宿エカサク と行左  
新エニシ 三ミツ 三ミツ 三ミツ 極入宿エキナシタツ 付ありアリ トテ  
感エモイ て墨仪酒肴モクイシヨウヨウ ありアリ トテ  
禮エチ おと拂アフタス 有アリ テ  
賜ケル わ。歎カク たりアリ トテ  
或人アリ 向後苑アヒョウエン 脊カムイ 帝タケシマ 皇居カムイ 禧子カムイ 礼成門院エチジモンエン 院エン  
院エン 有アリ トテ 行ハシメテ 予曰アガマタク 四礼シヨウリ と 持ハサフ トテ  
帝タケシマ 路ル 道ドウ 連レン 章カタマリ のあアリ トテ 之後光嚴院エカサクエン と え

中門ノ一ノ所后後とあらましを  
礼成門院の事と云ふナラム帝還幸の後  
院等とちりてわくよ牛宮み徳セノ事多シ後  
東院院と近号ニキニ家故ニテ内のみす事あり  
松平村右衛門院 松平氏代ノ子也

うすくま序書を竟せ  
河井一葉の  
著者不<sup>明</sup>

松年大參  
松年大參  
松年大參  
松年大參  
松年大參  
松年大參  
松年大參  
松年大參  
松年大參  
松年大參

山下はゆ  
林猿八郎  
松の根を柳の枝にあわす年  
生ひある地名をゆくあり  
八情山による良少ノ神ニシテあり小森内高称

乞うとよき心リ二十二社。誣式。眉書より法本  
列。高隆法曰上。下。良。裁内。下。良。玉岳。而。  
師時ノ記曰江師曰高良大明神者武内也ト非  
ム。良者。左。右。岳。而。神号。曰。高良玉岳命。  
以テ滿兩頭。令奉行之故。奉号。玉岳。

冠の老拙。其名義々何。乃とテノ年。赤詳。或人  
曰是。レ。變。多。の。あり。古。年。カ。ナ。ト。モ  
ハ。ち。と。乃。ノ。年。シ。然。至。テ。ト。わ。フ。ノ。キ。多  
ケ。セ。れ。エ。ク。ト。ヒ。況。ナ。ト。意。ア。ミ。老。拙。ト。モ  
リ。ト。老。者。整。裝。ト。ク。ス。ノ。見。ク。ノ。ミ。此。ニ。少。ト  
ウ。す。あ。ラ。れ。多。度。無。ミ。モ。ア。ラ。ス。ト。後。奉。テ。神。祖

の。祭。祝。那。成。廟。ノ。祭。

孫。祀。ヤ。カ。ク。リ。ヤ。ト。ク。ト。モ。神。ノ。ソ。シ。ニ。有。モ。ナ。ゼ。  
ラ。の。被。タ。孫。ト。祭。ア。ト。モ。ト。カ。ク。ト。心。シ。ク。ル。ル。  
御。老。者。整。裝。ト。ク。ス。ノ。見。ク。ノ。ミ。此。ニ。少。ト  
ウ。す。あ。ラ。れ。多。度。無。ミ。モ。ア。ラ。ス。ト。後。奉。テ。神。祖

歟。

戊子正月廿四日公宴

松含春色

御製

弟東ももまく。ア。モ。ト。ミ。梅。ア。ト。松。ア。ト。

因白 家照ノ四十一

ラ。シ。ト。モ。ア。ラ。ミ。ナ。ク。ノ。多。ア。ラ。ス。ト。松。ア。ト。松。ア。ト。

第六二三之光卿の少林寺ノ一寺中年高尼也  
を代の歌心とせしも其のまゝせたる

中院

後一位通玄 七八八

子世のまゝりて後のみれん者とらす 桧の心多

清水谷

正二位實業 六十一

久之世の元氣のまゝ多めり 里家下 松ノ枝  
又ナリに多き園東の序連歌

紹心

まれ石も岩石も松や木作の春

長寧ノ洲ノはめあくら  
。府下ト性高院ハ或ひ居ケドウソ大雄山正覺  
寺と号セ——法華上人忠告空ニ遭遇セシムル  
萬象年中みち列法華の場ト後アレ——  
卿の寺即宝臺院ノ品大夫人の考大の場ト伊豆  
ノ一百石把波と寄持トクヒヨウ卿 豊後守  
院生と称トム性正覺と号セ——ある十八年  
廷府の時今いゆく處——

三井院をりし甲斐新所本わくと持名山教安  
寺と号す杏宿和尚ニ齊下塙尾山の下モ近トテ  
千君の嘉延道場也——三井院と号す。辛巳

親考のもの

四十歳より内、裡を主と、後光以降の系を  
二年六月廿二日、後西院の万治四年正月十九日  
太上皇の宮を入る。是年九月四日御セ、後永和二年  
ナリサウルハ、明正寺帝の本院也。(四)

後水尾の清是東福院の御在上  
四十竹年以來かくの間里番あ  
里番アハタタタタタタタタタタ  
竹ノ子ノ子ノ子ノ子ノ子ノ子ノ子

ヨニシマ  
少くのす  
ナハニ  
傳承基ス  
わんじ  
トモア

少元うへ 極行の本錯簡脱字且ツナリヤモニ  
みまうシトガシテテ予善ナシテアシテアシテ  
藤河ノ記ハ一條ノ禪問の少元ナシテレシキ

シテナシテ形リトカシム

。高車に大食調アズ群書類要等ナシテ黄鐘ハ大  
石調シテ石の多ヘ袁徵の切ヘ食ナリ名食  
多用ヘ黃鐘の調子ナリ伶倫家タイニツメ  
調シテ考む

。易经の官能語長ヘ長ヘウロニトスか無事  
ヒト人ナリ予曰隋煬帝作ル長襦ノ十二破  
名仙裾トヒナナリテ少元ナシテ

